東アジア古代における諸民族と國家

川本芳昭　著

堀　内　淳　一

本書は、魏晉南北朝時代の民族問題を中心に長年の研究蓄積をもつ著者による、一九九八年に出版された『魏晉南北朝時代の民族問題』（汲古書院、以下前書）[1] 以降に公表された論文をまとめたものである。本書については既に伊藤一彦による短評[2]があるが、本書評では各章の内容を紹介した上で、全體の構成と著者の目指すところについて確認し、本書で展開されている論考の意義について考えてみたい。

まず、本書全體の構成を示し、内容の紹介を行いたい。

序言

第一篇　漢唐間における北中國の動向　――民族問題を中心として見た――

第一章　北朝國家論

第二章　北魏文成帝南巡碑について

第三章　鮮卑の文字について　――漢唐間における中華意識の叢生と關聯して――

第四章　三國期段階における烏丸・鮮卑について　――交流と變容との觀點から見た――

第五章　北魏内朝再論　――比較史の觀點から見た――
第二篇　漢唐間における東アジアの動向と古代日本の國家形成
第一章　漢唐間における「新」中華意識の形成　――古代日本・朝鮮と中國との關聯をめぐって――
第二章　隋書倭國傳と日本書紀推古紀の記述をめぐって　――遣隋使覺書――
第三章　倭國における對外交渉の變遷について　――中華意識の形成と大宰府の成立との關聯から見た――
第四章　倭の五王の自稱と東アジアの國際情勢
第三篇　漢唐間における西南中國の動向
第一章　漢唐間における雲南と日本との關係について　――比較史の觀點から見た――
第二章　民族問題を中心として見た魏晉段階における四川地域の狀況について
第三章　民族問題を中心として見た五胡十六國南北朝期段階における四川地域の狀況について
第四章　民族問題を中心として見た北朝後期段階における四川地域の狀況について
第四篇　漢唐間の民族をめぐる諸問題と東アジア
第一章　民族問題を中心として見た魏晉南北朝隋唐時代史研究の動向
第二章　遼金における正統觀をめぐって　――北魏の場合との比較――
第三章　崔致遠と阿倍仲麻呂　――古代朝鮮・日本における「中國化」との關聯から見た――
第四章　中國前近代における所謂中華帝國の構造についての覺書　――北魏と元・遼、および漢との比較――
あとがき　――所謂「少數民族」の理解をめぐって――

第一篇「漢唐間における北中國の動向」では、著者がこれまで研究の中心においてきた、鮮卑族によって建國された國

家である北魏の「部」國家體制の實態とその歴史的意義を扱うと同時に、本書全體の見通しを示している。

第一章「北朝國家論」は北朝史を單なる胡族が中國社會へ同化した時代と見るのではなく、新たな中華の創出として評價する。それとともに、時代的には、異文化の融合という觀點から、遼・金・元・清までも視野に入れるべきとし、空間的には、古代東アジア諸國の成長過程との類似性を指摘している。この章は第一篇冒頭に置かれているが、實質的には本書全體の議論の目的と範圍について述べられており、序論的役割を果たしている。なお、「北朝國家論」の初出は『岩波講座　世界歴史』（一九九九）であるが、本書に收錄されるに際して、北朝史研究の成果が持つ、時間的・空間的な廣がりについて多くの言及が加筆され、本書の目的を明確化しようとしている。

第二章「北魏文成帝南巡碑について」は、一九九七年に報告された北魏文成帝の南巡に關する新出史料から、當該期の北魏內朝制度を探ったものである。この碑に記される巡幸隨從者の官職には史書に見られないものが多く記されており、中でも內朝に關する官職が多く含まれる。著者はこれらの官名から北魏前期の內朝の實態を檢討し、『魏書』が北魏前期の記載を意識的に排除している可能性に論及している。

第三章「鮮卑の文字について ――漢唐間における中華意識の叢生と關聯して――」では、『隋書』經籍志などにみえる鮮卑族の「國語」を取り上げ、民族の言語・文字と、漢字との關係を考察する。『魏書』世祖紀の「初造新字千餘」以下の記述から、北魏前期の鮮卑語が漢字音を用いて萬葉假名のように記述され、助詞や語尾のような語詞に對應するため、文字を選定して表記の統一を圖ったと推測する。その上で『國語眞歌』『國語十八傳』などの鮮卑語で書かれたとされる書物が、自民族の文學や歴史を記錄する上で『萬葉集』や『日本書紀』に比類しうるものであろうとし、東アジアの諸民族の國家形成、民族形成における中國の政治思想の影響を示す一例とする。

第四章「三國期段階における烏丸・鮮卑について ――交流と變容との觀點から見た――」においては、北魏王朝の前段階として、三國期の烏丸・鮮卑の南下と中國王朝との交流を、前漢・後漢中期までと、後漢末・三國期に分けて追及す

る。前漢・後漢を通じて、烏丸・鮮卑は匈奴と漢の間で屬民・傭兵として扱われつつも、次第に勢力を擴大し、長城を乗り越える形で居住域を廣げていった。後漢末以降、烏丸・鮮卑は獨自の習俗を維持したまま、漢人官僚を自己の勢力内に吸收していくことで、政治的に自立を目指すようになる。三世紀段階での烏丸・鮮卑は長城地帶において中國と密接な交流を展開する段階に達しており、以後、急速な變化を遂げ、中國に甚大な影響を及ぼすようになる起點であると結論附ける。これは、一方では塞外から塞内への民族の移動であるが、「中國の擴大」という視點からみれば、中國的な要素が北アジア・東アジアへ擴大していく繼續的な歴史の中に位置附けられるとする。

第五章「北魏内朝再論 ――比較史の觀點から見た――」では、北魏の内朝の構成員や職掌の檢討から、二つの視點を提示する。著者の「内朝」理解は、既に前書において、後宮の諸官ではなく、皇帝の周圍にいる「侍官の總稱」として廣い意味で用いられているものと述べられている。それを前提として、一つは、北魏前期の胡漢對立の歴史的意義について、もう一つは北魏の内朝などに見られる國制の東アジア史における位置附けについて論じている。前者は、近年の胡漢對立の重要性を相對化する見解に對して、北族系侍臣の特殊な立場を强調することで、改めて胡漢の對立を基軸とする著者の歴史的立場を確認する。後者では、北族系侍臣が多く就官していた内朝官の性質を、日本古代の人制、前漢期の郎官制と對比させ、東アジアにおける國家形成期に共通する特色を示す。

第二篇「漢唐間における東アジアの動向と古代日本の國家形成」は、著者のそれまでの漢唐間の北中國の理論を空間的に擴大し、古代日本や朝鮮の國家形成を論じる。一聯の議論の中から、東アジア古代における「中華」とは何か、という問題に迫る。

第一章「漢唐間における「新」中華意識の形成 ――古代日本・朝鮮と中國との關聯をめぐって――」では、倭・古代朝鮮・華北で成立した五胡諸王朝に見られる、自らを中華とする意識が、どのようにして成立したのかを論じる。これら

の古代國家はいずれも、中國王朝から夷狄と見なされ、その册封體制下に一度は組み込まれながらも、册封體制を突き破って中華を「標榜」するに至っている。同時に、彼らの「中華」意識は、官制・用語などの面で、あくまで傳統中國の政治思想の枠内で形成されている。このことは、魏晉南北朝時代の人口の大流動によって引き起こされたと考えられ、華北の五胡十六國・北朝も含めた東アジアの古代國家に一致する歴史展開であるとする。

第二章「隋書倭國傳と日本書紀推古紀の記述をめぐって ――遣隋使覺書――」は前章で述べられた東アジア古代國家の「中華」意識の議論を、遣隋使に及ぼす。『隋書』と『日本書紀』の記述内容を比較し、從來知られている相違點を、隋に對する倭國の「中華」意識の發露ととらえ、當初、大王を「天弟、日兄」とする強い自己主張を見せた倭國が、隋との關係を重ねるにつれ、一定の讓歩を示したとする。このような遣隋使派遣における倭國の强烈な自己主張から、古代日本における倭國の王が中國の朝貢國となったという自己意識を持ったのか、という點に疑念を示す。

第三章「倭國における對外交涉の變遷について ――中華意識の形成と大宰府の成立との關聯から見た――」では、七世紀後半に大宰府が古代日本の外交官廳として確立するに至るまでの倭國の對外交涉の變遷を、時代ごとに概括する。特に、古代日本において朝鮮半島・大陸との接點となっていた北九州一帶に置かれた一大率、那津宮家、筑紫大宰に注目し、それらが古代日本の對外關係史の中でどのような意味を持つのかを追求する。

古代日本の外交官府として論じられている一大率、那津宮家、筑紫大宰はいずれも國内的な監察據點・軍事據點としての役割が主であり、外交機能は附隨的なものであったことを史料から追い、それが律令制國家を完成させる段階で、前章までで述べた「中華」意識の發露として、漢における樂浪郡や唐における揚州と同樣の、邊境において朝貢を受ける場所として大宰府を置くことになる、と結論する。

第四章「倭の五王の自稱と東アジアの國際情勢」は、前書第五篇第一章「倭の五王による劉宋遣使の開始とその終焉」および、直前三章の立場から、『宋書』に見える倭の五王について再檢討する。倭の五王による都督號の自稱を宋が追認

するようになった契機は、北魏の南侵と關聯附けて理解できる。倭王による都督號の自稱は、古代日本が倭王瓚以前に遡って「中華」意識を持っていたことを推測させる。このような變化は、鮮卑族が自立していく過程と軌を一にしており、中原王朝の弱體化がもたらした、東アジア諸民族に共通の動向として把握すべきであるとする。

第三篇「漢唐間における西南中國の動向」は、漢唐間の四川、雲南の非漢族に關する論考をまとめたものである。漢代に西南中國に存在した滇國は、倭國と同様の形式を持つ金印が與えられていたことが知られており、ともに册封體制の邊緣としての共通點を持つ。

第一章「漢唐間における雲南と日本との關係について」では、古代日本と古代雲南の歴史的發展過程を比較する。中國を中心とした世界システムを想定すると、日本と雲南はその外緣部という點で共通し、どちらも魏晉南北朝期に中國中央の支配力の減衰にともない、半ば從屬し半ば獨立した立場を取った。西南中國では隋唐王朝の成立により、從來の支配者層は衰退していくが、それに代わって南詔、大理が勢力を擴大する。朝鮮半島の新羅や、その背後にあった古代日本と「歴史的平行性」が認められ、中國王朝を中心とする古代東アジアの世界システムが構築されていたことが認められる。

第二章「民族問題を中心として見た魏晉段階における四川地域の狀況について」、第三章「民族問題を中心として見た五胡十六國南北朝期段階における四川地域の狀況について」および第四章「民族問題を中心として見た北朝後期段階における四川地域の狀況について」は前書第四篇第三章「蠻の問題を中心としてみた六朝期段階における各地域の狀況」で論及されなかった四川地域の蠻の實態について、魏晉から北朝後期までを通じて檢討した一聯の論考である。四川地域には魏晉時代からほぼ全域に非漢族が存在していたが、五胡十六國時代初期に獠族が大量に移住してくる。獠は四川全域にわたって居住し、その居住地域には王朝の支配が及んでいなかった。宋・南齊時期には、このような狀況に對して王朝による面的支配を貫徹しようという動きは強くないが、梁代に入ると王朝による支配領域の擴大がみられ、この傾向は西魏が

四川を占領した後も繼續して進展している。統一王朝である隋唐の支配下では、さらに獠の「中國化」が進められたが、唐代にはそれに反撥する獠の叛亂も頻發する。これらの叛亂があったものの、大勢としては五胡十六國から隋唐へ時代が降るに從い、一貫して王朝による支配が強化されていく傾向が確認できるとする。

第四篇「漢唐間の民族をめぐる諸問題と東アジア」は、それまでの議論をさらに時間的、空間的に擴大し、漢から元までの東アジア前近代王朝の特質について明らかにしていく。

第一章「民族問題を中心として見た魏晉南北朝隋唐時代史研究の動向」は、この篇の議論の前提となる、研究史の整理である。朴漢濟の「僑民體制」論を手掛かりとして、現在の魏晉南北朝隋唐時代の民族研究の動向を整理し、著者の立場を示す。北朝では胡族と漢族の文化が融合し、第三の新文化が生まれたとする朴漢濟の論を評價しつつ、その論を肯定する側も、批判する側も、「胡」と「漢」の線引きを自明のものとしていることを批判する。

次いで、漢から唐宋までの福建、巴郡の研究を引き、長い時間をかけて漢族と非漢族が相互に融合していく姿を示す。その結果として、當初の漢族とも非漢族とも新たなる「漢族」が生まれてくるとする。

著者は從來の漢族と非漢族を二分する考え方に對して、所謂漢族が出現する過程に注目していると述べ、各時代の民族問題を論じる際には、その「段階」における問題として論じ、固定的に捉えるべきではないという立場を示している。

續く第二章「遼金における正統觀をめぐって ―― 北魏の場合との比較 ――」では、本書第一篇第三章の議論から出發し、北魏と、契丹族の建國した遼、女眞族の建國した金の「中華」意識を比較する。遼初期の史料からは、契丹族が自らを中華の正統とするような意識は見られないが、聖宗期以降から意識の變化が見え始める。道宗朝の記錄では道宗が中華文明の保持を華夷の別の基準とし、自らを「文明化」していると見なしたことを傳えており、遼末には中華意識に基づき自らを「正統」と見なすようになってきていた。金では五德終始說に基づく議論が盛んに行われ、最終的に國號に合わせ

た金德から、前朝の德運を繼承するという理由で土德に變更される。

華夷の別と中華文明の理解や、王朝の德運に關する議論からみえる遼・金の「中華」意識の變遷は、北魏と酷似しており、これは單なる偶然ではなく、「中世的」な非漢民族王朝に共通する特徴であり、禪讓と五德終始說を排除した宋とは大きく異なっているとする。

第三章「崔致遠と阿倍仲麻呂 ――古代朝鮮・日本における「中國化」との關聯から見た――」では、唐に仕えた崔致遠と阿倍仲麻呂を通じて、朝鮮と日本を比較する。朝鮮の「天下」は中國、朝鮮を包含するものであるが、日本のそれは日本一國に限定されたものであった。このことが、崔致遠が新羅王を唐朝皇帝の下に位置附ける原因となった。一方で、兩者は非漢民族官僚として、「夷狄」と見なされていることを自覺しており、同時に、新羅人、日本人として强い自己意識を持つに至っている點で共通していた。

崔致遠と阿倍仲麻呂はともに科擧を經ているが、それは賓貢科、あるいはそれに類する非漢民族に對する恩典的なものであったと推測される。阿倍仲麻呂が唐の官僚となることに對して、當時の日本の朝廷は、中國と日本をともに中華とする立場が取られており、寛容であったと推測される。

しかし、後世の評價は異なっている。崔致遠が朝鮮を代表する詩人として現代にいたるまで長らく高い評價を與えられてきたことに比して、近世以降、阿倍仲麻呂は祖國を捨てた人物として、ナショナリズムの觀點から批判が加えられている。この差は、朝鮮が中國の册封國であり、日本がそうではなかったこと、科擧制度が實質的に導入されていたかどうかなど、國の體制や歷史の相違に根差した面があるとする。

第四章「中國前近代における所謂中華帝國の構造についての覺書 ――北魏と元・遼、および漢との比較――」は本書の總括的部分であり、冒頭に取り上げた北魏の內朝に立ち返り、その問題をそれ以降に展開した東アジアの諸王朝についての論考との關聯の中に位置附ける。北魏の內朝と前漢、遼との比較を行うことで、民族の枠を超えて前近代における所

謂中華王朝の本質を問う。

遼・前漢はともに、皇帝の側近の侍衛官に由來する「ネケル」・「郎官」と呼ばれる側近集團を有していた。これは北魏の內朝官とその起源、機能において非常に類似している。民族、時代を異にするこれらの王朝で同様の官がみられることから、これらの官が家父長的權力のもとに家產制國家が建設されていく過程において、必然的にみられるものであるとする。

本書で扱われている地域は、歷代中國王朝の興亡が繰り返された中原地域のみならず、日本・朝鮮などの東アジア諸國、中國西南邊境まで含んでいる。また、時代的にも漢代の郎官の問題から、元・清までの長期間に及んでいる。かかる廣大な議論領域であるが、前書で展開された議論を前提として讀み直せば、そこには首尾一貫した著者の問題意識が存在している。

著者は本書の「序言」で、前書では「後に世界最大の民族に成長する漢民族という民族が、どのようにして形成されていったのか、それに對し、古代日本はどのように成長、對峙してきたのか」（四頁）という問題を明らかにすることが究極的な目的であったと述べる。それに對して本書では、「東アジア前近代における「中華」と「周邊」の關係如何の問題」（五頁）へとより全體的、普遍的な問いへと深化させている。

前書において、北魏を建國した鮮卑族拓跋部、あるいは南朝の領域內に廣く存在した「蠻」が、いかにしてそれまで中原にいた所謂「漢民族」と融合を果たし、それ以降の「漢民族」となっていったかが論じられてきた。著者は一貫して、漢代までの「漢民族」と、胡漢融合、あるいは蠻との共存を經て成立した唐代以降の「漢民族」が、同じ呼稱であるとしても同質のものではないと說明している。

しかし、それらは中國史全體から見れば、中華と周邊の關係の一つであり、時代・地域が異なれば、まったく別の形で

中華と周邊の關わり方が見いだせる。既に前書の「おわりに」では、日本や朝鮮半島について「文物や人間の移動が華北から具體的にどの様に及んでいたかといった問題」を取り上げつつも、充分には展開できていなかったと書かれている（前書六一三頁）が、本書で著者が企圖したことは、この問題をより普遍的に擴大し、地域的には東アジア全域、時間的には前近代全てに敷衍しうる論を示すことにあったのではないかと考えられる。

右で述べたような目的や意義の妥當性は、東アジア前近代の歴史研究者にとって、無條件で肯首できるものであろう。これらの議論のスケールは近年の研究書の中でも特筆すべき廣さ・深さを持つといえるが、その議論範圍の廣さゆえに、評者にはもう少し補足的な説明を求めたい箇所もあった。

第一點として、日本や朝鮮と中國との關係を規定した東アジアの册封體制から生まれた天下觀や自立へのプロセスが、北魏やその後の「征服王朝」にも適應しうるのか、という疑問を感じた。例えば第二篇第一章では、五胡・北朝・隋唐・古代日本をいずれも册封關係を主體とする魏晉南朝的システムの中から成長したとする。また、第三篇第一章では雲南と日本、朝鮮半島が中華帝國を中心として見た場合に、共通する地政學的特徴を持つとする。中國の東方、南方との關係は、西嶋定生のいう「東アジア世界」として、册封關係によって規定された秩序を持っていた。(3)

著者の論じる通り、巨視的に見て、倭國や北魏などの國々は、中國の影響下から一定のプロセスを經て自立するに至った、という點で共通している。第二篇第四章では『晉書』卷一〇八慕容廆載記を引き、慕容鮮卑の自立の過程と倭國のそれとの共通性を示している。しかし、同載記の引用で、前燕の皇帝に卽位した慕容儁が東晉の使者に言った言葉として「爲中國所推、已爲帝矣」とあり、これはあくまで中原の漢族の支持を背景とした發言である。五胡諸王朝、遼・金・元・清は中原へ勢力を擴張した結果、皇帝を名乘るようになった。これらと、倭國のように獨自の勢力圈を確立した上で、その範圍を天下と定義し、その中で自立した王朝とは、中華と邊境を比較するという本書の趣旨からみると、過程が異なっているというべきではないか。五胡の諸王朝や、後の遼・金・元・清のように中國の內部に領土を持った王朝がいず

れも皇帝を名乗っているのに對して、倭・匈奴・突厥は天皇・單于・可汗という獨自の稱號を持っていた。これは、中華の影響を受け、やがて獨自の天下を持つに至った邊境の國々が、皇帝によって治められる中國王朝の天下とは違うものであるという自己主張であり、本書で扱う中華と邊境の問題を考える上で、決して小さい問題ではないように思える。(4)

中原まで勢力範圍を廣げず、一貫して中華世界の邊緣にありながら、獨自の天下を持つに至った事例として漢と匈奴あるいは、唐と突厥との關係をどのように位置附けるかについても議論があれば、本書の論點がより明確になったように思える。

もう一點は、時代區分的な記述についてである。漢から元・清まで前近代を通じて記述するためには、どうしても古代・中世・近世といった時代區分に觸れざるを得ない。例えば、第一篇第五章では「元や清に北魏のそれと相似た組織が生じた理由は、皇帝を中心として高度に發達した中國王朝の中樞に、いわば古代的ともいうべき族制的原理に基づく集團（モンゴル、滿州、鮮卑）が座を占めたがため」（一二八頁）とあり、また、第四篇第二章では金と宋の德運の變更を比較し、金が「中國の政治思想の影響を受けながらも、近世的なそれではなく「中世的」なそれの影響下にあった」（四一八頁）とする。これらの中で用いられている古代・中世・近世は單なる年代を示しているのではなく、「古代的ともいうべき集團」「中世的」な政治思想」というものを想定しているのは明らかであり、集團の在り方や政治思想の持つ特徴として、古代的、中世的なものを想定していることがうかがえる。

この問題は、今までも數多くの議論がなされており、著者も愼重に斷定的な記述を避けている。そのため、本書では時代區分について明確な定義が示されているわけではない。しかし、以下のような記述から、著者が東アジアの國家が經るべき一定の發展段階を想定しているように理解できる。第三篇第一章では漢から唐にかけての西南中國について「古代朝鮮・日本と同樣の動きはあったが、いまだ自立の段階にまで達することはなかった」（二六六頁）とあり、また第四章第四篇では「家父長的權力のもとに家產制的國家が建設されていく過程」（四八二頁）が普遍的な視座であるとしている。これ

らの記述からは、東アジア諸國家には共通する發展過程が存在しているものの、その發展段階は地域や分野（政治體制、政治思想など）ごとに差があると理解すべきであろう。もし、この理解でよいのであれば、かつて前田直典が東アジアにおける發展が地域ごとに異なっており、時代が降るにしたがってその差が小さくなると指摘している[5]點と、どのように關聯するのだろうか。

時代區分の問題は、それぞれの研究者の歴史觀に直結しており、「正しい時代區分」を規定することはおおよそ不可能である。ただ、著者が「古代的」「中世的」という語で示そうとした內容を詳しく知ることで、本書の意義をより深く理解できたであろうと思う。

かつて「時代區分論爭」と呼ばれた議論が、明確な結論を持たぬまま下火になって久しい。「發展段階」「時代區分」といった用語が問題とされなくなった背景に、研究の個別細分化があったことは、改めて言うまでもない。北朝の、あるいは北魏一代の歴史について個別具體的に論じるだけであれば、それが「古代」か「中世」かという差で、行論上の問題が生じないこともあろう（もちろん、個々の歴史家として立場を明確にすべき、という批判は受けるだろうが）。大きな議論に踏み入る前に、個々の分野を掘り下げる研究も必要である。しかし、本書を前にすると、評者も含めて、大きなスケールの議論をすることに及び腰になってはいなかったかと反省させられる。

本書は、時代・地域を限定して具體的事例を掘り下げる論考にとどまらず、それらの上で歴史モデルを構築する論考にまで進んでいる。それによって東アジアの前近代とは何か、という普遍的な問いに答えようとしている。それゆえ、「古代的」「中世的」の指す具體的內容が問題となりうるのである。近年の研究書で、ここまで廣汎かつ普遍的な議論を行っているものはわずかであろう。

本書の「あとがき」で、著者は次のように述べている。「中國における民族問題は現狀においては結局、人權の問題として、あるいは歴史の總體とのかかわりにおいて存在すると深く認識される段階にまではまだ至っていないといわざるを

えない」。ここに、「歴史の總體」を扱おうとした本書の現代的意義について、著者の意圖が詰め込まれていると言えよう。

註

（1）前書については、既に窪添慶文（『東方』二二一、一九九九）、石見清裕（『東洋史研究』五八―四、二〇〇〇）、三崎良章（『唐代史研究』三、二〇〇〇）による書評がある。

（2）伊藤一彦（『中國研究月報』六九―八、二〇一五）

（3）西嶋定生『中國古代國家と東アジア世界』（東京大學出版會、一九八三）

（4）一部の五胡諸國家では「天王」というそれまで使われていなかった稱號が用いられており、王位と皇帝位の間に位置づけられていたとされる（谷川道雄『隋唐帝國形成史論』（筑摩書房、一九七一）第三篇第三章「五胡十六國・北周における天王の稱號」）。この場合にも、五胡諸國家が『周禮』に基づく天王號を用いながら、なぜ最終的に『周禮』などに典故のない「皇帝」にならなければならなかったのか、という問題は自明ではないであろう。

（5）前田直典「東アジアに於ける古代の終末」（『歴史』一―四、一九四八）。なお著者と前田という、ともに北朝、元という非漢民族王朝を主とする研究者から、相似た時代區分に關する議論が別個に提示されたことは、中國史における非漢族王朝の研究の持つ意義を示していると言えるであろう。

附記：本書評脱稿後、『唐代史研究』一九號に、平田陽一郎氏による書評が掲載された。併せて參考にされたい。

二〇一五年三月　東京　汲古書院

二二糎　八＋五一二＋五頁　一二〇〇〇圓＋税